

DATA：眼科

- 施設認定：日本眼科学会専門医制度研修施設
- 主な対象疾患：白内障（超音波乳化吸引術、水晶体囊外摘出術、眼内レンズ挿入術）、角膜疾患（全層角膜移植、表層角膜移植、深層層状角膜移植、角膜内皮移植、角膜輪部移植、培養角膜上皮移植、培養口腔粘膜移植、薬物療法、特殊コンタクトレンズ）、ドライアイ、緑内障



◀眼科HP

難易度の高い白内障手術にも対応

当科には8名の医師が在籍しており、近年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により診療活動が制限されていますが、外来患者さんは1日平均120～150名前後、うち初診患者さんは10～25名程度です。手術件数は、コロナ禍の影響を受ける前は年間約2,600件実施し、一昨年は1,800件程度にまで減少しましたが、昨年は約2,200件まで回復しています。白内障、角膜移植、ドライアイ、アレルギーなどの前眼部疾患にとくに力を入れています。

手術症例の過半数を占めるのが白内障手術です。当院の患者さんのピーク年齢は75～80歳のため、多くは加齢に伴う白内障ですが、先天性や糖尿病性、さらにはアトピー性皮膚炎や外傷が原因となるものもあり、こうした白内障は年齢にかかわらず発症します。

白内障は徐々に進行するため気づきにくく、視力低下のため自動車の運転免許が更新できずに眼科を受診し、白内障であることがわかった、という方もいらっしゃいます。加齢に伴う白内障の場合、普通の

患者さんの「もっと見える」「ずっと見える」治療を目指す

生活に不自由がなければ点眼薬で進行を抑え、生活に支障をきたすほど視力が低下している場合は手術により治療します。治療は保険診療の範囲内で行い、保険適用外の高額な多焦点レンズなどは使用しません。

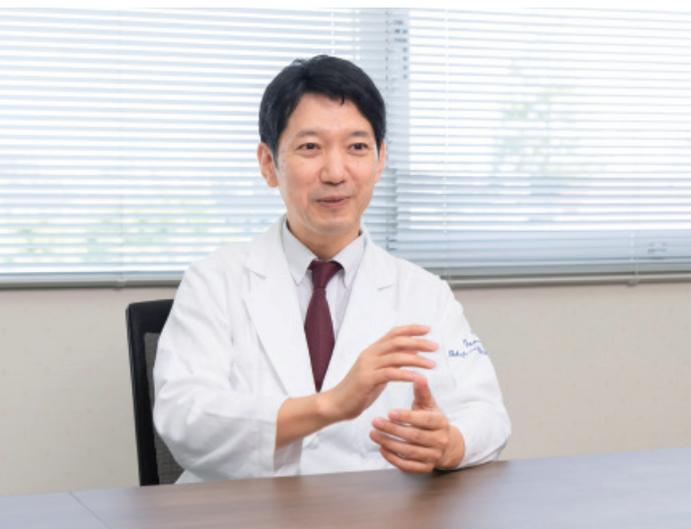
白内障手術は地域の眼科の先生方も実施されていることと思いますが、特殊な白内障や、手術に全身麻酔が必要となる認知症の患者さんなどいらっしゃいましたら、当院にご紹介頂ければと思います。

患者さんとの信頼関係を大切に

白内障手術に次いで多い手術が角膜移植術で、年間200件程度実施しています。20代から90代まで、幅広い年齢層の方に移植を実施していますが、最も多いのは高齢の方に好発する水疱性角膜症の患者さんです。水疱性角膜症は角膜内皮細胞の機能不全により、角膜に浮腫と混濁が生じる疾患で、視力低下のほか強い痛みが生じることがあります。

一般的に角膜移植は白内障手術と異なり、必ずしも十分な視力が得られるとは限りません。また、移植する角膜は人工物ではないため、患者さんの眼の状態によっては拒絶反応や機能不全が起こる確率があり、再移植が必要となることもあります。

当院では角膜センター、アイバンクも併設しており、長年の治療や研究、医学的検証の蓄積をしています。その結果、角膜移植後、患者さんの術前の虹彩の状態などが角膜移植術の予後に大きくかわることがわかっています。患者さんには手術前の状態を丁寧に説明することで、手術後の見通しについて理解して頂き、手術を任せて頂けるようにしています。さらに手術では、角膜移植術後の乱視を極力減らして、よりよい視力が得られるよう心がけています。



角膜移植術のフロントランナーとして

眼科

技術の導入と普及にも貢献

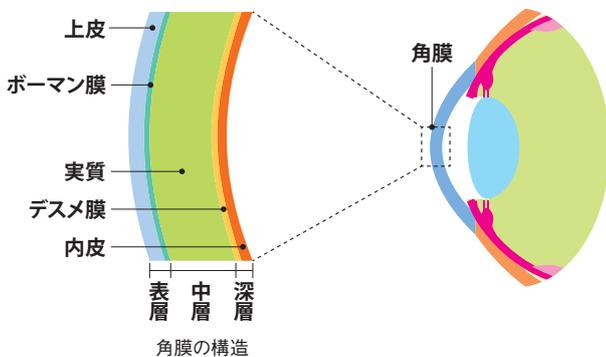
当院は、角膜移植術のフロントランナーとして新しい治療法を取り入れ、普及にも力を入れています。その一つがデスメ膜角膜内皮移植術（DMEK）です。角膜の最も内部の薄いデスメ膜を含む内皮層だけを移植する方法で、早期の視力回復が見込めるほか、角膜の透明性が維持できる術式です。日本で実施できる施設はまだ多くはないため、当科は技術導入の支援にも力を入れています。全国各地の病院から眼科医に学びに来てもらい、新しい技術を伝えることで、日本全体の角膜移植術がレベルアップするように努めています。

また、地域の先生方からはもちろんのこと、全国から患者さんをご紹介頂いているため、術後の患者さんを地元の先生方に診て頂けるよう、連携用の資料作成や情報提供にも力を入れています。

献眼の減少への対応も

角膜を必要とする方は増えている一方、近年はコロナ禍の影響もあり、以前は年間 250 ～ 300 件あった献眼が 200 件前後に減少しています。これは当院だけでなく全国的な傾向で、角膜移植を待つ患者さんの待機時間が延びているのが現状です。

この現状を打開するため、アイバンクではコーディネーターが中心となり啓蒙活動に力を入れています。また、院内で看取らせて頂いた患者さんのご遺族に臓器提供に関する意思の有無を伺う、ルーティン・リファerral・システム（routine referral system）も試みています。



一方で、角膜を提供頂いた方のご遺族には感謝の気持ちをお伝えするため、「ドナーファミリーの集い」なども開催しています。ご遺族の方に話を伺うと、「最初は献眼することで痛い思いをさせたのではないかと思ったが、今は故人の角膜がどこかで生きていて感じている」などと話され、献眼してよかったという声も多数頂いています。

目が見えずに付き添いの方に連れられて来院された方が、見えるようになり自分で歩いて退院される姿を見ることは本当に喜びであり、私たちにとっても大きな励みになっています。これからも地域の先生方と連携しながら、地道に研究を続け、「もっと見える」「ずっと見える」をテーマに日々研鑽していきますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

Dr's profile

Takefumi Yamaguchi
山口 剛史 医師

出身地
三重県鈴鹿市

趣味
海釣り、子育て

眼科を選んだ理由
視力や乱視量など客観的指標でしっかり治療でき、患者さんがよくなるのを実感できるから

スポーツ歴
大学時代はアイスホッケー部

座右の銘
Where there is a will, there is a way (意志あるところに道は開ける)

【掲載写真について】 感染症対策を行ったうえ、撮影時のみマスクを外しております。

医療機関の先生方へ

市川総合病院 初診事前予約申込書

検索

当院と地域の病院・診療所の先生方との間で、患者さんのご紹介などを円滑に行えるように、「地域医療連携室」を設置しています。ご不明な点がございましたら、下記へお尋ねください。

患者支援センター地域医療連携室 TEL 047-322-0151(内線2214) FAX 047-324-8539

開室時間 月曜日～金曜日：午前9時～午後5時 土曜日：午前9時～午後1時(第2土曜日は休診日)